

作物名: きく
病害虫名: 白さび病 (病原: *Puccinia horiana*)



写真1 きくの被害葉（葉表）



写真2 葉裏に形成された冬胞子堆

1 被害の特徴と診断のポイント

- 発生初期は、乳白～淡黄色で直径1mm程度の円形斑点が生じる。
- 斑点が数mm程度になると、葉裏に乳白～淡黄色で隆起した円形の冬胞子堆が形成される。
- 病斑が多数発生した葉は、次第に枯死する。
- 症状が激しい場合は、葉全体に発生するほか、茎や花弁にも発生する。

2 伝染源・伝染方法

- 本病は絶対寄生菌であり、きくの植物体で一生涯を過ごすと思われる。なお、野生ぎくに発生する白さび病菌は、きくに寄生しにくいといわれている。
- 一次伝染源は、きくの植物体に潜伏している冬胞子又は菌糸。
- 冬胞子は湿度90%以上で発芽し、小生子（担子胞子）を形成する。風雨やかん水の飛沫で小生子が飛散して二次感染する。小生子は、数百メートルの範囲に飛散する。

3 発病しやすい条件

- 発病適温17℃と比較的冷涼な温度や、90%以上の多湿条件を好む。
- 小生子は高温乾燥に弱い。

4 防除方法

- 一次伝染源となる発病株をほ場から持ち出し、適切に処分する。
- 健全苗を使用する。また、前作発病がみられたほ場からは、採苗しない。
- 発病葉は速やかに取り除き、適切に処分する。
- 不要な葉や脇芽は取り除き、風通しを良くする。
- 施設栽培では、高湿度にならないよう、換気に注意する。
- 発病が進んでからの薬剤防除では効果が限定的となるため、予防防除に努める。
- 薬剤耐性菌対策のため、ローテーション散布を行う。

5 出典

(1) 参考文献

- 農業総覧花卉病害虫診断防除編第1巻草花①（農山漁村文化協会）

- インターネット版 日本植物病害大事典(全国農村教育協会)
- インターネット版 防除ハンドブック 花の病虫害(全国農村教育協会)

(2) 写真

- 宮城県病虫害防除所撮影

(令和7年5月作成)